

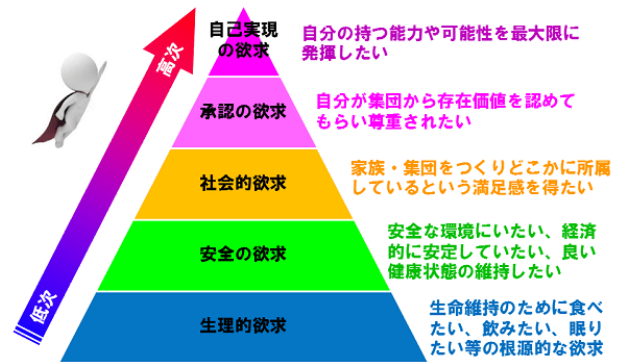
1 令和4年度 本校の教育目標

全ての生徒同士が安心して学び合う学校をみんなで力を合わせてつくる

(1) 経営方針（育てたい生徒像・目指す教師像）

安心して学び合う生徒の状態は、右の図から、安全の欲求・社会的欲求・承認の欲求が満たされている状態である。言い換えれば、「家庭的に安定し、健康であり、所属意識があり、周りから認められていると感じる状態」となる。この上で、生徒は自己実現をしようと行動し始める。だから、まず、全ての生徒が安心して学び合う教育の場の実現を目指す。

▶▶ 人間の欲求は、下位の欲求が満たされると上へ上がっていく。



校訓「継続こそは力なり 自律こそは力なり」
(継承と創造)

4つの力「恕・考・表・挑」を生徒も教師も磨く

恕・・・人を大切にする力
考・・・自分で考える力
表・・・自分を表現する力
挑・・・チャレンジする力

安心して学び合う力「恕」を育てる

- ①ペップトークの精神を大切にする
 - ・一番応援すべきは自分自身
 - ・受容（事実の受け入れ）
 - ・捉え方変換・してほしい変換・背中一押し
- ②シンプルな約束
 - ・自分がされて嫌なことをしない、言わない
 - ・生徒手帳（生徒心得）を原則とする。
- ③グループエンカウンターの実施
- ④失敗したらやり直す（学びのチャンス）
 - ・どうやり直すかを自分で考え表現し、挑戦する（反省ではない）
- ⑤指示・命令・号令なしで考動する。
- ⑥一人一人の学び方・学び場を尊重する。
 - ・F組も学び場の一つ。
- ⑦縦の繋がりを大切にする。
- ⑧サポーターとして保護者と力を合わせる。
- ・・・

自己実現を目指す力「考・表・挑」を育てる

- ①安心して学び合う授業の創造
 - ・一人一人の学びを保障する。
 - ・「分からない」と自分から表現できる。
 - ・「教えて」と言われたらとことん挑戦する。
 - ・挙手指名よりも自由発言を推奨
 - ・教師は指導ではなく、生徒同士をつなぐ役
 - ・孤立を防ぐため、一斉指導は10分以内。
 - ・ゴールを示し、振り返りをする。
 - ・意見や考えを認め合う雰囲気大切にする。
- ②パフォーマンス評価
 - ・間違いや失敗は学びのチャンス。
 - ・自分の学びを証明する機会がある。
- ③生徒会・委員会活動の充実
 - ・生徒は学校をつくる主人公
 - ・教師は助言者
- ・・・

全力での取組と感動の分かち合い (全力は六ツ美北の誇り)

(2) 重点努力目標

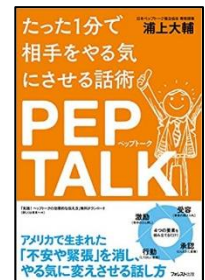
- ① 人を大切にする力（恕）を生徒と共に育てる。
- ② 生徒も教師も、自分で考え、表現し、挑戦する力を身に付ける。
- ③ 見える学力よりも見えない学力（4つの力）を優先する。

2 補足説明

(1) 安心して学び合う力「恕」を育てる

①ペップトークの精神を大切にす

「言葉には力があります。言葉の力を身に付けることで、目の前にいるあなたが本気で励ましたい人の心を震わせ、やる気に火をつけることができます。そして、この言葉がけには成功のルールがあります。そのルールに沿って励ましの言葉をつくっていくだけで、たった1分で相手の心に火をつけ、やる気にさせることができる、それがペップトークなのです。」(『たった1分で相手をやる気にさせる話術 PEP TALK』(フォレスト出版)より)



- ・一番応援すべきは自分自身

→自分にペップトークを使えるようになると自己肯定感が高まり、周りの人にも使えるようになる。

- ・①受容(事実の受入)→②承認(とらえ方変換)→③行動(してほしい変換)→④激励(背中一押し)

昨年度現職研修で研修会実施→本年度5/16月に全校集会で講演会開催(保護者も希望者参加)

②シンプルな約束

「自分がされて嫌なことをしない、言わない」という一つの約束を大切にす。守れなかったときは、罰ではなく、やり直しをする。(参考

④)

六ツ美北中生活委員会による生活の三本柱「挨拶・身なり・整頓」をみんなで大切にす、生活のルールは生徒手帳(生徒心得)を原則として、生徒一人一人が考え判断する機会を大切にす。

生徒の様子に違和感が見られたら、すぐに「それはおかしい」と指導するのではなく、どうしてそのようなことをしたのか、しようと思ったのか、心の内面を聞くようにす、信頼関係を築き、導く。

生徒心得	
Ⅰ 登校・下校	
1.	安全に十分注意し、徒歩で通学する。
2.	制限で登下校する。
Ⅱ 校内生活	
1.	欠席、遅刻、早退は必ず担任に連絡する。
2.	始業時刻、下校時刻を守る。
3.	器物を破損した時は、教員に届ける。
4.	学校外に出るときは、必ず担任に申し出て、その指示に従う。
Ⅲ 服装・持ち物・身なり	
1.	制服は学校で決められた標準服とする。
2.	持ち物は、学校で決められたカバンに入れて通学する。
3.	冬服時は名札を左胸にしっかり付ける。
4.	生徒手帳を携帯する。
5.	学校生活に不要なものは持っていない。
6.	頭髪は、男女とも清潔でさっぱりとした髪型にする。女子は後ろ髪が肩にかかるときは、えり足をゴムで束ねる。
7.	くつは白の運動くつとする。
8.	くつ下は白のソックスとする。
9.	清掃は、教室でズボン・スカートはハーフパンツ等に替えて行う。

③グループエンカウンター等の実施

4～5月は、仲間づくりの大切な時期。クラスや学年の仲間を知り、温かい関係づくりができるように、グループエンカウンターや学級レク、学年レクなどを実施する。年度初めだけでなく、年間を通じて、計画的に実施していくことも大切である。

④失敗したらやり直す(学びのチャンス)

「自分がされて嫌なことをしない、言わない」という約束が守れなかったなど、失敗をしてしまったら、頭ごなしに指導するのではなく、どうしてそうなってしまったのかをよく聞き、どうすればよいかを自分で考えるようにす、やり直しをどのようにするか自分で表現し、行動に移すようにす(挑戦する)。単に、反省させて終わりにしたり、仲直りさせて終わりにしたりするのではなく、やり直すことで、大切なことを学び、その後、お互いに安心して生活できるようになるようにす。

⑤指示・命令・号令なしで考動する。

「～しなさい」というような指示で生徒を動かすのではなく、その時・その場でどのように行動するのがよいかを生徒に考える機会を与え、自分たちで進んで行動できるようにす。自分たちでできるようになると自信が付き、自己肯定感が生まれるきっかけとなり、安心して学校生活を送る力となる。

⑥一人一人の学び方・学び場を尊重する。

集団で学ぶことがどうしても苦手である生徒。周りの音が気になって落ち着いて学ぶことができない生徒。身体的理由で一緒に学ぶのが困難な生徒。授業中に指名されることが怖くなり、いっしょに学ぶことが困難になった生徒など、学校には様々な生徒と一緒に過ごしている。どの生徒にも安心して学べる場を保障するために、校内フリースクール（F組）を設置している。

このような観点から、F組は学び場の一つであり、通常学級と同等の一教室であることを職員全員で共通理解している必要がある。通常学級がだめだからF組に落ちるという下に見た考えではないし、教室復帰を目指す教室でもないことを全員で認識することが大切である。そして、できれば、F組にも気軽に立ち寄って中にいる生徒に声をかけ、みんなで生徒の社会性を育てるようにしたい。

⑦縦の繋がりを大切にする。

委員会、部活動、ストレビクス伝達会、夢おどる伝達式、体育大会の応援活動、ハーモニーフェスティバルでの練習や感想の交流、修学旅行・スキー学習での「おかえりなさい」黒板など、様々な教育活動の中で異学年の交流を行う。この活動を通して、サポートし合う温かい関係づくりができ、安心できる学校生活を実現する。

⑧サポーターとして保護者と力を合わせる。

コロナ禍で授業参観中止などにより、保護者に学校に来てもらう機会が減っているので、授業参観でなくても、一家庭一支援などで自由参観という形で学校に来ていただける機会を増やす。ただし、お子様の参観だけでなく、他の学級へ出向いてもらい、学習で困っている生徒の支援をしていただくようにしたい。このことを、PTA総会でも話し、保護者をサポーターとして、いっしょに安心できる学校づくりに参加してもらえるようにしたい。

（2）自己実現を目指す力「考・表・挑」を育てる

①安心して学び合う授業の創造

一人一人の学びを保障することは、学校の責務である。だから、授業中に、困っていたり、あきらめてしまったり、仕方なくその場を繕ったりして、孤立感を深めている状態をなくしていきたい。

そこで、生徒には「分からない」と自分から表現できること、「教えて」と言われたらとことん教えることに挑戦していくことをしっかり生徒に伝えたい。

また、挙手発言は、参加できる生徒と参加できない生徒との壁をつくりやすいことや、指名されることへ抵抗を感じている生徒もいることから、安心して授業を受けられるように、意見や考えを求めるときは、その場で立って自由に発言するようにしたい。発言する順もお互いの中で譲り合ったり相談したりすることで温かい関係が生まれると考えている。

教師は、指名して授業を進めていくことよりも、発言した考えをどのようにつないでいくかにより手腕を発揮するようにしたい。（ファシリテーターとして力を磨く）

授業は、すべて生徒主体に進める内容だけでなく、どうしても教師から教えなければならない内容も含んでいる。しかし、教師が前に立って一方的に一斉授業を続けると、だんだん分からずに孤立していく生徒が出てきてしまう。そこで、一斉指導の時間は原則として10分以内を目安とし、教え合い活動、チーム学習などで、一人一人が授業に安心して参加できる状態をつくり出したい。

学びを生徒自身の力で進めることができるように、本時の目標（ゴール）を、授業の導入の段階でしっかり示し、授業の最後に、何を新しく学んだか、自分の中で何が変わったかを振り返る時間を確保するようにする。

自由発言をするときもチーム学習をするときも、お互いの意見や考えを受け入れ、認め合った上で話し合うことが大切であることを生徒に話しておくことも大切である。

②パフォーマンス評価

(1) ④のことは、授業でも通じることである。正解ばかりを追い求める授業をしてしまうと、間違えることを恐れるようになって、意見や考えを言うことができなくなってしまう。間違えることが学びのチャンスであることを何度も生徒に話し、自由に発言できる雰囲気をつくっていききたい。

また、間違えたときや学んだことを確認したいと思ったときに、生徒が自らレポートを作成し、担当教員に提出する。これを評価していくようにしたい。これがパフォーマンス評価である。自分が理解したことやできるようになったことを担当教員にアピールするためのものであるので、レポート形式だけでなく、実際に演じて見てもらうという形でもよい（技能教科では、特にそうなることが多いと考えられる）。また、自主学習をしたノートや問題集を見せるというものでもよいと考えられる。ただし、そこには、㊟あて（証明しようとした目標）、㊦ためし（最初の現状）、㊧んせき（どこが分かっていたか・できていなかったか）、㊨んしゅう（理解できたこと・できるようになったことが分かる）が分かるようになっていように生徒に話していくようにしたい。

小テストや定期テストの後もやり直しとして、レポートの提出を奨励し、それも評価の一部に加えていきたい。（テストも自分を伸ばすための一つの手段であるという意識を持たせたい。）

このパフォーマンス評価が充実してくれば、教える側から必要以上に課題プリントを出す必要も少なくなってくるだろう。

また、生徒の家庭での課題については、提出は自由とし、提出を強要しないことを全員で確認したい。

③生徒会・委員会活動の充実

昨年度より、委員会の前に企画会（委員長・副委員長・補佐（生徒会役員）・委員会顧問全員）を行い、主役は生徒であるという認識の下、学校を自分たちでつくるという意識を高めるようにしている。

委員会の組織づくり後は、教員はなるべく助言者的立場で参加し、委員長・副委員長が中心となって委員会活動が進められるようにしたい。そうすることで、自分たちは貢献しているとか学校を支えているという自己有用感が高められ、安心して学べる学校づくりにつながると考えている。

(3)「・・・」の意味

全ての生徒同士が安心して学び合う学校をつくっていくために、3月の職員会でも意見を出し合った。今回のものにはそれが含まれている。このようにして、「みんなで」手だてを考え実践していきたい。教育目標に掲げた「みんなでつくる」とは、生徒・教師・保護者・地域が力を合わせて学校をつくるのだという当事者意識をもつことを意味している。

「・・・」としたのは、新たなアイデアをみんなで考え追加修正し、実践していくためである。